

JAPAN JOURNAL OF GOLF EDUCATION

ゴルフ教育研究

Vol.4 No.1

CONTENTS

《資料》

- | | | |
|-----------------------------------|--------|--------------|
| ・ 大学体育のカリキュラム構成原理から見たゴルフの価値 | 小林 勝法 | ・ ・ ・ ・ ・ 1 |
| ・ 東京大学のゴルフ授業 | 工藤 和俊 | ・ ・ ・ ・ ・ 6 |
| ・ 中央大学文学部のゴルフ事例 | | |
| ーゴルフの楽しみを追求するー | 森 正明 | ・ ・ ・ ・ ・ 9 |
| ・ コースラウンドを通してゴルフから学ぶ | | |
| ー学習院大学の授業ー | 高丸 功 | ・ ・ ・ ・ ・ 10 |
| ・ 複数の大学教育経験からみるゴルフ授業の課題 | 濱部 浩一 | ・ ・ ・ ・ ・ 13 |
| ・ 学生にゴルフを教える | | |
| ープロゴルファーとしての授業展開例ー | 野澤 むつこ | ・ ・ ・ ・ ・ 18 |
| ・ 学期途中の G ちゃれ開催の試み | | |
| ー関西初の武庫女 G ちゃれの実践からー | 松村 公美子 | ・ ・ ・ ・ ・ 24 |
| ・ JGGA からのゴルフ用品提供の申請状況と大学ゴルフ授業の課題 | | |
| | 高橋 宗良 | ・ ・ ・ ・ ・ 28 |

大学ゴルフ授業研究会

Volume4, Number1 April 2018

【資料】

大学体育のカリキュラム構成原理から見たゴルフの価値

小林 勝法（文教大学）

キーワード：教員の信念、履修希望、生涯スポーツ

1

【はじめに】

高等学校までの教育は学習指導要領に基づいて行われるため、教員の裁量の範囲が大学と比べて少ない。大学においては裁量の範囲が大きく、その教員の信念（教育哲学）や使命感に基づいて行われている。わかりやすく言えば、教員が何を大切だと思ひ、何を学生に教え、育てようとしているかと言うことであり、これは人によって若干異なる。この信念や使命感がその教員や授業を個性的にしているし、この信念や使命感による裁量の余地がなければ、学術は発展しない。ただし、教育のすべてが教員に委ねられているわけではない。後述するように、所属大学の教育理念や法令に従う必要がある。

この信念は、教育目的と内容、指導方法のそれぞれに関連しているので、授業計画やカリキュラム編成にも反映される。体育に限らず、一般的にカリキュラムの目的に関する構成原理は以下の3つに分けられる。体育ではどのように考えられるか、その説明文も加えた。

- ・実用主義（日常生活や職業、社会の発展に役立つことを主目的とする）
健康・体力、スポーツによる社交性など
- ・文化主義（教育内容の文化を享受したり、継承・発展させたりすることを主目的とする）
スポーツ・運動文化、スポーツに関する科学的知識など
- ・人間主義（人格や諸能力の形成を主目的とする）
身体論、ライフスキルプログラム、身体の教養など

上記の3つのどの立場にあるのか、各教員が自覚

しておくことは重要である。そして、カリキュラム編成にあたっては、大学の同僚がそれぞれの立場にいるのかを理解しておくことも必要である。体育原理を学んだ教員は上記3つのバランスを取ること考えるであろう。しかし、運動部指導では比重を変えることもあるであろうし、民間スポーツ指導者は3つのバランスについて認識していない場合が多いだろう。本稿では、教養体育の授業やカリキュラムについて、構成原理の観点から、課題を整理し、ゴルフの教材としての価値について検討しよう。

【教育目的】

個々の大学の体育の目的を定めるときに留意する点は、「所属大学のディプロマポリシーとカリキュラムポリシー」「法令と行政」「体育原理」である。そして、その上で学生の「レディネス」を考慮する必要がある。ディプロマポリシーとカリキュラムポリシーに適っていないければ、その大学の教育に貢献しているとは言えず、大学にとって必要のない科目と見なされてしまう。したがって、ディプロマポリシーとカリキュラムポリシーに体育を位置づけることが重要である。ディプロマポリシーとカリキュラムポリシーは個々の大学によって異なるので、これ以上踏み込まず、「法令と行政」について検討しよう。体育原理については、上述した3つの立場について確認して欲しい。レディネスについては、【教育内容】で触れる。

（1）法令

大学が公教育として認可されている以上は、関連

法令に従わなければならない。そこで、まず、教育基本法に定められている大学の目的について確認しておく必要がある。第7条には以下のように定められている。

大学は、学術の中心として、高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。

したがって、「高い教養を培う」ことに教養体育の根拠が求められる。大学体育は一般体育とも以前は言われていたが、近年では教養体育とも言われるようになってきている。この呼称はこの条文にも合致していると言える。

さらに、学校教育法では、「第九章 大学 第八十三条」に以下のように定められている。

大学は、学術の中心として、広く知識を授けるとともに、深く専門の学芸を教授研究し、知的、道徳的及び応用的能力を展開させることを目的とする。

② 大学は、その目的を実現するための教育研究を行い、その成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与するものとする。

学校教育法で定められている「高い教養」に相当する内容が、「広い知識」や「知的、道徳的および応用的能力」と理解できる。繰り返すが、これらに教養体育の根拠が求められる。

さらに、大学設置基準では、教育課程の編成方針について、第十九条で以下のように定められている。

大学は、当該大学、学部及び学科又は課程等の教育上の目的を達成するために必要な授業科目を自ら開設し、体系的に教育課程を編成するものとする。

2 教育課程の編成に当たっては、大学は、学部等の専攻に係る専門の学芸を教授するとともに、幅広く深い教養及び総合的な判断力を培

い、豊かな人間性を涵養するよう適切に配慮しなければならない。

教育基本法の「高い教養」や学校教育法の「広い知識」などがより具体的に示されている。つまり、「幅広く深い教養」「総合的な判断力」「豊かな人間性」が教養教育を示しており、教養体育の根拠はここにあると言える。教養体育のカリキュラムの構成原理として、このことは重要である。

（2）行政

次に教養体育に関する国の政策について見てみよう。まず、健康増進法に基づき策定された「健康日本21（第2次）」（国民の健康の増進の総合的な推進を図るための基本的な方針）では、運動習慣に関する目標を定めている。30分・週2回以上の運動を1年以上継続している20歳～64歳の割合を以下のように向上させる目標である。

	2010年実態	2022年目標
男性	26.3%	36.0%
女性	22.9%	33.0%

第2期スポーツ基本計画（2017年度～2021年度）でも成人のスポーツ実施率（週1回以上）についての目標を定めている。2016年時点の42.5%を2021年には65.0%に向上させるという目標である。2016年時点の20歳代の実施率は全体平均よりも低く、男性が40.7%で女性が27.8%であった。

教養体育はこれらの政策目標の達成に向けて貢献すべきである。とくに20歳代には大学生も含まれているので、この年代のスポーツ実施率を上げるとは体育教員ができることであるし、その責任もある。

【教育内容】

前章では、教養教育としての重要性とスポーツ実施率の向上に貢献する必要性について述べた。本章では国民の健康増進に寄与するスポーツ実施率の向上にゴルフが教材としてふさわしいことを生涯スポ

ーツの観点から述べる。

（1）生涯にわたるスポーツ実施

スポーツの実施率を向上させるという観点から種目別・年代別の実施率を『レジャー白書 2016』（日本生産性本部）から見てみよう。図1と図2は男女の年代別実施率である。男性のサッカーとバドミントン、女性のバレーボールとバドミントンは、10代の実施率が高いが、20代で急激に減少し、その後も漸減している。生涯にわたって継続して行うのは難しいスポーツであると言える。一方、男性のゴルフ（コース）とゴルフ（練習場）は10代の実施率は低いが、20代以降は徐々に高まり、50代以降は実施率の上位に位置している。女性の場合は、数パーセントのままであるが、高齢になっても実施できるスポーツである。したがって、生涯にわたって行うスポーツとしてゴルフはふさわしく、大学体育の教材としてもふさわしいと言える。

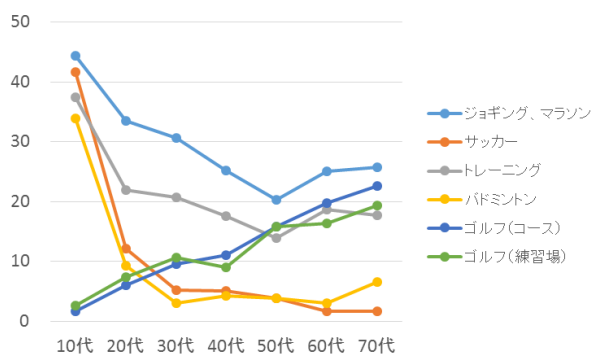


図1 年代別スポーツ参加率（男性）

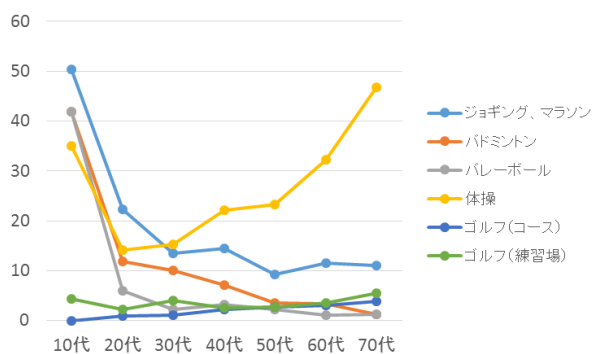


図2 年代別スポーツ参加率（女性）

（2）大学生の履修希望

教養体育のレディネスとして、受講者の履修意欲について、全国大学体育連合（2017）の「体育・スポーツ・健康科目の履修に関する意識調査報告書」を見てみよう。表1は大学生が履修したい種目の一覧である。上位にあるのは中高の体育や部活動で行う種目である。種目選択制を取っている場合には、学生の希望に応じてこれらの種目を開講することになろう。しかし、これらの種目は、先に見たように20代以降実施率が減少する。生涯にわたって行えるのでなければ、政府の目標達成には貢献できない。そもそも体育の目的として、「生涯にわたってスポーツに親しむ態度を育成する」を掲げている大学も多い。この目的を達成するためにこれらの種目はふさわしいと言えるのであろうか。

表1 大学生が履修したい種目

男子 n=1,558	%	女子 n=910	%
1 サッカー、フットサル	36.1	1 バドミントン	42.1
2 バドミントン	34.1	2 バレーボール	33.7
3 バasketボール	34.0	3 ダンス、舞踊	33.6
4 野球、ソフトボール	32.5	4 スキー、スノーボード	31.0
5 筋力トレーニング	28.3	5 ヨガ、ピラティス	29.9
6 卓球	27.9	6 バasketボール	28.2
7 バレーボール	27.7	7 卓球	22.5
8 スキー、スノーボード	27.1	8 水泳	19.0
9 硬式テニス	25.9	9 エアロビクス、健康体操	18.8
10 ボウリング	25.2	10 ソフトテニス	18.2
ゴルフ	11.3	ゴルフ	4.6

そう考えるとゴルフは男性の生涯スポーツとしてふさわしい種目と言える。女性はどうであろうか。

25歳～39歳の女性1,000人を対象にした北徹朗ら（2015）の調査によると、ゴルフをしている女性（177人）のゴルフを始めたきっかけは、「周囲の人に勧められたから」（50.3%）と「周囲の人がやっているから」（50.3%）が高いが、「以前やったことがあるから」（25.4%）も4番目に高い（表2）。大学の教養体育でゴルフを受講した55人のうち、約4割の21人が調査時点でゴルフを実施していた。したがって、大学の授業でゴルフを体験させることによって、大学卒業後にゴルフの実施率を向上させる可能性が高いと言える。しかし、ゴルフの履修希望は男女とも

に低い。うまくプロモーションすることによって、履修意欲を高めることが必要である。

表2 ゴルフを始めたきっかけ（25歳～39歳女性）

n=177	%
周囲の人に勧められたから	50.3
周囲の人がやっているから	50.3
楽しみ、気晴らしとして	39.0
以前やったことがあるから	25.4
年齢や体力、健康に合っているから	16.9
テレビ、ネット、新聞などで見て興味を持ったから	7.9
時間が確保できるから	6.8
世間の流行だから	6.2

（3）施設が多いという利点

ゴルフが生涯スポーツとして優れている点として、実施しやすさ、つまり、練習場の多さがあげられる。文部科学省（2010）「体育・スポーツ施設現況調査 平成20年度」から体育・スポーツ施設の設置箇所数を表3に示した。

表3 体育・スポーツ施設設置箇所数

庭球場（屋外）	8,121
野球場・ソフトボール場	7,733
水泳プール（屋内）	3,620
水泳プール（屋外）	2,800
ゲートボール・クロッケー場	2,575
ゴルフ場	2,423
ゴルフ練習場	1,911

上位の庭球場や野球場、水泳プールなどに次いで、ゴルフ場とゴルフ練習場も多い。上位のほとんどの施設が公営であるのに対し、ゴルフ場と練習場はほとんどが民営である。民営であっても経営が成り立っており、設置箇所数も多いことから、他のスポーツに比べても実施しやすいと言える。ゴルフ練習場の多くは、公営施設が営業していない早朝や深夜も営業している。ジョギングやトレーニング、体操な

どは、道路や自宅で、いつでも行えるので実施率が高いとも考えられる。ゴルフは利用料がかかるものの実施しやすさの面では他のスポーツに比べて優れている。

【ゴルフ授業の課題】

ゴルフを教養体育授業として開講することは、教養体育の理念や国の政策の面からもふさわしいことを述べた。実際に開講し、教育効果を上げるための課題を以下に述べる。

（1）学生の履修意欲の喚起

表1に見るように、大学生のゴルフの履修希望は高くない。お金がかかり縁遠いと思われていたり、中高年がするスポーツのイメージが強いのかも知れない。このような意識を払拭し、履修する意欲を喚起する必要がある。グラウンドなどの人の目につく場所で授業をしたり、レクリエーションスポーツとしてミニゴルフをしたりしてなじませることも有効だと考える。また、20歳前後は無料や割引券でプレイや練習ができる「ゴルマジ！」や「楽ゴル」のサービスを知らせることも有効であろう。

（2）教育目的の明確化とそれによる授業計画

ゴルフ授業の教育目的と体育のカリキュラム上の位置づけを明確にしておくことは重要である。また、担当者の信念（教育哲学）との関係も自覚しておくことも必要である。そして、その上で、教育目的を実現するための授業計画を作成しなければならない。

（3）成果指標の策定とその整合性

ゴルフ授業の教育目的が達成できたかどうかを判断するために、成果指標を策定する必要がある。成果指標は数値で判定できるものか、そうでなければ、ルーブリックを作成しなければならない。この成果指標の策定作業によっては、教育目的を再検討する必要性が生じるかも知れない。教育目的と内容、方法、成果指標が一貫していなければならない、そうでなければ、PDCAサイクルを循環させることはできない。授業やカリキュラムの質を常に向上させる

努力が必要である。

文献

厚生労働省（2012）健康日本21（第2次）

http://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/dl/kenkounippo_n21_01.pdf

スポーツ庁（2017）第2期スポーツ基本計画

http://www.mext.go.jp/sports/b_menu/sports/mcatetop_01/list/1372413.htm

日本生産性本部（2016）『レジャー白書2016』

全国大学体育連合（2017）体育・スポーツ・健康科目の履修に関する意識調査報告書

北徹朗・小林勝法・飯田路佳・佐野信子・中山正剛
（2015）成人女性における運動・スポーツの開始・継続・再開の要因に関する基礎的研究、SSFスポーツ政策研究4(1)：55-63

文部科学省（2010）体育・スポーツ施設現況調査平成20年度

http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa04/shiset-su/kekka/1261398.htm

資料

【資料】

東京大学のゴルフ授業

工藤和俊（東京大学）

キーワード： 東京大学、ゴルフ、授業

【東京大学概要】

東京大学は1877年に創設された国立大学である。世界の公共性に奉仕する大学として世界最高水準の教育・研究を維持・発展させることを目標としており、現在までに卒業生の中から8名のノーベル賞受賞者を輩出している。学部および大学院を合わせて約28,000名の学生が在籍している。伝統的に、学部教育の基礎として教養（リベラル・アーツ）教育を重視しており、全学生の必修授業として、教養学部スポーツ・身体運動部会の担当する身体運動・健康科学実習がある。2016年5月、全学的研究拠点としてスポーツ先端科学研究拠点が開設された。

【ゴルフ授業概要】

東京大学では、2年生を対象とした選択授業「スポーツ身体運動実習」の1種目としてゴルフ授業を実施している。実技種目多様化の一環としてゴルフ実技を開始したのが1994年である、導入以来20年以上経ち、受講生の総計は3000名を超えている。1コマの定員は40名であり、2017年度は夏学期週4コマ、冬学期2コマ開講された。

授業は、学内実習と学外コース実習から構成されている。学内実習は駒場キャンパスの人工芝ホッケー場を利用し、パッティング、アプローチ、練習ボール（フライトボール）を利用したアイアンショット練習等を行い、適宜ビデオを用いたスイングフォームチェックを実施している。雨天時は体育館内でのパッティング・アプローチ練習、バランストレーニング、ビデオを用いたルール講習、各自のフォームチェック等を行っている。また、毎回プリントを

配布し、ルールやマナーの理解を促している。

【学内授業例】

第1回授業

- ・ 種目選択、ガイダンス

第2回授業

- ・ 安全上の注意、ゴルフにおける事故例
- ・ パッティングのインパクト感覚
- ・ 近距離のアイアンショット
- ・ グリップの握り方
- ・ スイングのイメージ作り

第3回授業

- ・ パッティングの姿勢・アドレス確認
- ・ パッティングで確実に入れられる距離を確認する
- ・ カップの見方
- ・ 歩測のしかた
- ・ 2人組パッティングゲーム
- ・ スイング動作（アドレス、テークバック、トップ、ダウンスイング、インパクト、フォロー）の確認
- ・ アプローチゲーム

第4回授業

- ・ ゴルフの基礎知識：ゴルフクラブ各部位の名称、ゴルフコースの概要
- ・ アプローチショット：ランニング、ピッチ＆ラン。
- ・ アプローチショットの距離感を磨く
- ・ ラウンドを想定したショット練習
- ・ アプローチ→パットのゲーム

第5回授業

- ・ ゴルフの基礎知識：打数の通称、打球の方向について
- ・ 初心者によくあるテークバックの間違い
- ・ 素振りの仕方
- ・ ハーフスイング
- ・ スロースイング
- ・ アイアンショット練習

第6回授業

- ・ ゴルフの基礎知識：クラブの種類と特性
- ・ フォームのチェックポイント
- ・ ビデオを用いたアイアンショットのフォーム確認
- ・ スライスの直し方

第7回授業

- ・ ゴルフの基礎知識：コースでの打数およびショットの内訳
- ・ プロゴルファーのスイングフォーム
- ・ 番手ごとのスイング：共通点と相違点
- ・ アイアンショットの距離の内訳
- ・ アプローチ→パッティングゲーム
- ・ ビデオを用いたアイアンショットのフォーム確認

第8回授業

- ・ ラウンドを想定したティーショット練習
- ・ ハザード想定練習
- ・ ビデオを用いたアイアンショットのフォーム確認

第9回授業

- ・ 学内グラウンドでのミニラウンド（図1、表1）

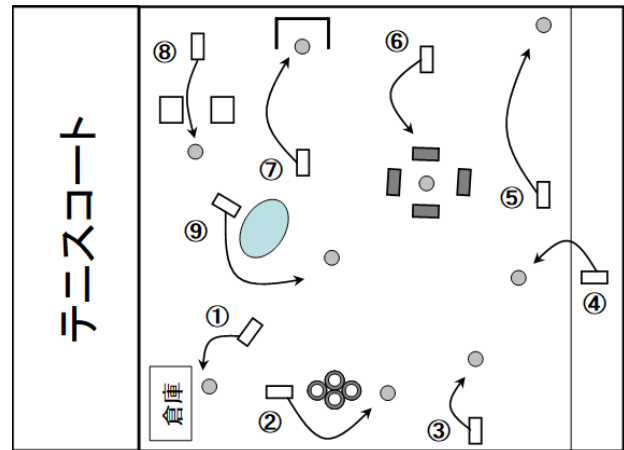


図1 学内グラウンドでのコース設定

表1 各ホールの説明

ホール名	説明
1. 傾斜グリーン	カップが傾斜地にあるのでパッティングが難しい
2. タイヤ越え	タイヤを越えてティーショット
3. ラフショット	傾斜地の草むらからティーショット
4. 柵越え	ティーショットで柵越え。越えなかった場合は+1打でティーショット打ち直し
5. サービスホール	障害物のないミドルホール。バーディーを狙って
6. マットハザード	カップのまわりに2つマットを置く。マットに触れたら+2打。欲張らずに刻んで
7. 栄光のゴール	カップがサッカーゴールの中にある。奥からは打ちにくい
8. ストレートライン	コースの両脇に障害物。真ん中を狙って
9. 池越え	ティーショットで池越え。池に入ったら+1打でティーショット打ち直し

【学外ラウンド実習】

学外コース実習は、千葉県千葉市にある東京大学
検見川総合運動場の7ホールショートコースを利用
している。学内でのアイアンショット練習はプラス
チック球（フライトボール）であったが、学外実習
では実球を用いた練習を行う。そのほか、バンカー
練習およびグリーンでのパッティング練習を実施し、
その後7ホール（パー24）のラウンドを行う。学生
4名につき1名の教員がつき、コース内でのマナー
の説明を含めたレッスン形式で実施する。

【資料】

中央大学文学部のゴルフ事例

ーゴルフの楽しさを追求するー

森 正明（中央大学 文学部）

キーワード：楽しさ、社会性、実習体験、パーティ

9

【はじめに】

中央大学の正課体育は、学部ごとにカリキュラムが異なる「縦割り方式」で編成されており、このゴルフ授業は1年次の必修科目であり、前期15週を大学にて、夏季休暇中4泊5日の実習として志賀高原にて実施していた。

2017年度から「G ちゃれ」が始まったことで、これまでの授業展開に加えて、8月第一週の2日間に八王子カントリークラブにて本コース体験を実施した。

【目的】

文学部の集中授業種目では、技術やマナーの向上を目指すことはもちろんのこと、行き帰りの交通手段やホテルの宿泊マナー、食事の楽しみなど生活面すべての成果を目指して開講している。雑費等の会計や表彰式を兼ねたパーティの司会なども含め、総合的にゴルフを体験することを目指している。

【実施方法】

文学部の1年次の必修科目で4泊5日の実習については、大学からの費用支援3000円以外は自己負担となるので、希望者のみを集めて実施している。2017年度の履修者は11名であった。

前期15週の授業内容の中で、フォーム、スイングなど映像を使ってフィードバックしている。また、コースに出ることを想定してターゲットバードゴルフによるゲームをコンペ形式で2、3回実施している。

実習の実施にあたっては、リスクマネジメントの観点から往復の新幹線利用やバス利用、宿泊先の安全配慮等についても、事前学習を実施している。

2017年度のゴルフ授業は『G ちゃれ』の好影響により、ゴルフの最終目標を体験して授業の実習に入ることができた。他の実習を伴うキャンプやスキーの授業では、必ず総まとめとしての実習体験をキャンプ場やスキー場で体験できる。その意味でゴルフ授業のみがコースに出て実習体験をすることが難しい種目であった。ここに楔を打つことができ、かつ服装マナーやクラブバス体験など、実体験としてなぜ配慮が必要なのかを体得できた。

体育からスポーツへという一つの目的を、教科教育としての役割を持っている以上、本コース体験は極めて貴重であったと考えている。

授業そのものは、実習で開催するパーティの表彰時に学生のコメントとして全員に感想を報告してもらっている。今年度のパーティでは、本コースでの体験への高評価がきわだっていた。

2017『G ちゃれ』は、関東、関西そして中京地区など、その輪が広がり、ゴルフ授業の成果をあげている。今後も本学の授業の重要な内容として継続予定である。

【まとめ】

総評として、まだまだ改善の余地も多くあり、学生評価も生かした授業改善が必要であるといえる。より良きゴルフ授業を目指して取り組んでいきたい。

資料

【資料】

コースラウンドを通してゴルフから学ぶ

ー学習院大学の授業ー

高丸 功（学習院大学）

キーワード：コースラウンド、実習、安全

10

【はじめに】

本学では、総合基礎科目として体育実技科目が配置されており、スポーツ健康・科学Ⅰ（文学部・理学部必修）スポーツ健康・科学Ⅱ（理学部2年生必修）スポーツ健康・科学Ⅲ(a,b)（全学部共通選択）というカテゴリとなっている。その中で、ゴルフは週日授業として3コマ、集中授業として1コマ開設している。全学部（法、経済、文、理、国際社会）の学生が、週日授業または集中授業として「ゴルフ」を履修できる状況となっている。本稿では、集中授業として実施しているゴルフ授業について報告する。

【集中授業の目的】

年齢、性別に関係なく、生涯にわたって楽しむことの出来るゴルフを、実際のラウンドを通して、ゴルフへの理解を深め、他人へ迷惑をかけずにラウンドできるようにルール、マナー、エチケットを学ぶ事を目的としている。全学部共通の選択授業ではあるが、ゴルフ場でのラウンド経験者か前期の授業履修者を対象としている。

【授業内容】

授業内容は、学内授業と学外実習に分かれている。学内授業は3回で、4月のオリエンテーション（授業概要説明）と7月に2回実施している。7月の2回は、講義1回（用具・服装・ルール・マナーについて）と実技1回（実践的練習：学内練習場等）でそれぞれ90分間実施している。

学外授業は、8月第1週目火曜日～金曜日で実施する事を原則としている。その年の学事暦やゴルフ場の都合によって多少の変動はある。スケジュールは、以下のとおりである。

第1日目 11:00 ゴルフ場到着

練習 ハーフラウンド

第2日目 7:30 スタート、1R または 1.5R

第3日目 7:30 スタート、1R または 1.5R

第4日目 7:30 スタート、1R 後 入浴 昼食

14:00 頃ゴルフ場出発

※スタート前、ラウンド後にはドライビングレンジ、アプローチ、パッティング練習を行う。

学生が負担する費用は、3泊4日、昼食、夕食付で約43,000円（交通費別）となっている。詳細は、下記の通りである。支払いは、最終日に学生がそれぞれフロントで清算する。

・担ぎ 1.5R 7000円×3日=21,000円

（昼食代 1,000円込み）

・宿泊費 夕食付き

（ツイン） 6,000円×3日=18,000円

（シングル） 6,500円×3日=19,500円

・カート代金 1.5R 2,520円×3日=7,560円

・ハーフカートプレー 4,600円

・カート代金ハーフ 840円

合計（シングル） 43,600円（ツイン） 45,100円

※ゴルフ場利用税は減免、消費税込、朝食・交通費別

【実習場所】

実習を行うゴルフ場は、1995年～2006年鶴舞カントリークラブ（千葉県）、2007年～ 烏山城カントリークラブ（栃木県）を利用している。ゴルフ場の選定については、宿舎（ロッジ）が併設されていること、36H または 27H であること、練習場があることなどを優先事項としている。その理由としては、具合が悪くなった場合、歩いて宿舎に戻れる、朝の移動が容易である、夕食もゴルフ場の敷地内で済ませることができるといった事柄が挙げられる。何れにしても、授業として実施しているので、学生の安全を第一優先にし、移動や経済的な負担を少なくしつつも、練習等の環境の良さを考慮に入れている。朝食は、各自で準備することとし、ラウンド終了後の夕方に、翌日分を買い出しに行く。その際に、コインランドリーに寄り、ウェアの洗濯も行うことも可能である。

【学生への注意事項】

＜クラブハウス等での注意事項＞

・挨拶

教員や学生同士だけでなく、フロント、キャディーマスター室、練習場、コース作業員の方々、レストラン、メンバーやゲストの他のプレーヤーなどゴルフ場にいらっしゃる全ての方々に対してである。発声しなくても、会釈でもよい。

・ドレスコード

2008年頃までは、上着を持参していた。事前授業では、イラスト等を示して服装に関して説明をしている。ゴルフショップで購入した場合は問題がないが、自前の洋服で組み合わせて持参する学生には注意が必要である。夏季の炎天下であるので、丁寧に指導している。近年は、くるぶしの上までの靴下であれば、半ズボンでも良い。クラブハウス内では脱帽。

・ラウンド後

エアガンでズボンやシューズの芝をしっかりと落と

す。

・ロッカールーム

ロッカールームのベンチに、荷物を広げたり、スコアの集計を行ったり、他の利用者の妨げとなつてはいけない。

・浴室

注意事項として、学生が同時に入浴し、シャワーを独占したり、大声で話したりして迷惑をかけてはいけない。また、湯船に入る前に身体を洗うことやタオルを湯船に入れないといったことも注意する必要がある。メンバーの迷惑にならないように、なるべく目立たないように配慮する。

・自家用車の駐車場所

学生がゴルフ場玄関付近には駐車しないように指導する。

＜実習でのラウンドに関する注意事項＞

*危険防止と進行を優先する

・ボール、クラブによる事故には十分注意する。

・時間厳守、2時間 10 分以内にハーフランドする。前の組から離されないようにする。

・同伴者や他のパーティーの迷惑にならないように配慮する。

・一人が打つ時は、必ずその人を静かに見る。

・移動は早く、素振りとは1回までにする。

・飛ばない女子からティーショットを打つこともある。

・2打目からは準備のできた人から声をかけて打つ。

・先にホールアウトした人が旗を持って全員が終わるのを待つ。

・ホールアウトしたらすぐ次のティーに行き、そこでスコアを書く。

・危ない方向へ打った時は「フォー！」と叫ぶ。

・ディボットは必ず元に戻し、目土する。

・グリーン上ではスパイクを引きずって、傷つけないよう注意する。

・グリーン上は走らない。

- ・サブグリーンは通らない。
- ・バンカーは元通りに平らにならして出る。
- ・トラブルで2度打って出ない時は手で出す。

<学生の安全>

- ・ラウンドの組み合わせ

学生3名に1人の教員が入るよう組合せるが、参加者が多い場合は、経験者の学生だけでラウンドをさせることもある。その場合は、前後に教員のいる組を配置する。

- ・カート

カートが誘導ではなく自走方式のため、原則運転免許保持者が操作し、横転・衝突などの事故がないよう指導している。

- ・その他

打球事故、熱中症、日焼け、落雷、虫刺され（ブヨ、蜂、あぶ、蚊等）などについても、十分注意している。

【まとめ】

学生は、コースラウンドを通してゴルフから技術、エチケット、ルール、ゴルフ場の施設についてなど多くの事を学んでいると思われる。社会人となってゴルフをする時、「あの授業が役に立った！」と感じてもらえるような授業を目指している。学生を引率してゴルフ場に行く事は、教員も多くの事に気付かされ、また学ぶ機会となっている。

【資料】

複数の大学教育経験からみるゴルフ授業の課題

濱部浩一(日本獣医生命科学大学)

キーワード：大学ゴルフ授業、ゴルフ授業課題、ゴルフ授業形態

【はじめに】

筆者は元レッスンプロ(レッスンプロ歴10年)であり、現在でも競技ゴルフを継続しているトップアマというゴルフ技能および豊富な経験(ゴルフ歴40年、現HC3)がある。

また、長年にわたり、複数の大学にてゴルフ授業を指導してきた教育経験(大学ゴルフ授業歴26年)がある。このことから、ゴルフの技術的背景と教育経験からみた大学ゴルフ授業の課題について考察した。

【筆者のゴルフ技能・指導キャリア】

筆者は23～33歳にかけて、サンケイスポーツ新聞社でゴルフ記者をしていた傍ら、同時期に早稲田大学高等学院ゴルフ部コーチ、日本医科大学ゴルフ部コーチ、また平成4年にJGRA(公益社団法人全日本ゴルフ練習場連盟)に入会して研修会に参加。この時期には伊勢丹ゴルフスクールでインストラクターを行っていた。

30～41歳頃、平成4年日本獣医生命科学大学専任講師として採用され大学にてゴルフ授業を開講した。また、本務校のみならず、他大学で非常勤講師として延べ6大学(最長で25年間)にてゴルフ授業を担当した。また、同時期に日本テレビゴルフガーデンにてゴルフスクールを主幹していた。

41歳にレッスンプロを廃業したのち、47歳にアマチュア復帰してJGA(公益財団法人日本ゴルフ協会)オフィシャルハンデ0.9を取得した。その後、ゴルフダイジェストオンラインゴルフ選手権(GDO.U14)にて全日本ファイナリスト(於：霞ヶ関C.C)、日刊

アマチュアゴルフ選手権にて全日本ファイナリスト(片山津G.C)、クリアビューゴルフクラブ&ホテル2014年度クラブチャンピオン、同クラブ5年連続クラブ対抗代表選手などの実績がある。

【延べ6大学でのゴルフ授業形態と実績】

筆者が経験してきた延べ6大学でのゴルフ授業とその内容について大まかに下記1)～6)に記した。各大学で長期間担当していたので、同時期に複数校を重複して行っていたこともあった。

1) 明海大学

平成2年から18年間、グラウンドのみでの授業を行い、1コマ50～70人、延べ5,000人を指導した。

2) 日本獣医生命科学大学

平成4年から25年間、グラウンドと教室のみでの授業で1コマ30人、延べ2,400人を指導した。ゴルフ場での夏合宿集中授業では平成22年に開始し、平成26年までの5年間で延べ60人を指導した。

3) 麻布大学

平成5年から20年間、グラウンドと打ちっ放し練習場(年3～4回)とショートコース(年1回)の授業で1コマ30人、延べ1,800人を指導した。また、夏合宿集中授業では山梨のショートコースを利用して平成10年から18年までの9年間で延べ180人を指導した。

4) 日本医科大学

平成6年から19年間、半期グラウンドでの授業と最終回1回の打ちっ放し練習場の授業で1

コマ30人、延べ600人を指導した。

5) 神奈川大学

平成19年から現在までの9年間、グラウンドと併設鳥籠(4y,12打席)の授業で1コマ25人、延べ600人を指導した。また、ゴルフ場での夏合宿集中授業では平成20年から現在までの9年間で延べ90人を指導した。

6) 文化女子大学

平成14年～3年間、大学付属施設のショートコースと体育館での夏期合宿集中授業にて延べ120人を指導した。

【結果と考察】

1) 大学ゴルフ授業における授業形態の分類と大学ゴルフ授業の現状

各大学での授業形態を振り返ってみると、各大学でその形態は様々であった。そして、筆者の大学ゴルフ授業経験(28年間)のなかで「どのような施設・環境を使用して授業を行ったか」を主眼として分類してみると、以下の①～④の形態に分けられた。また形態ごとの人数を総人数からの比率で表してみた。

① 学内授業型

「グラウンド」内および教室などでの授業形態を受講した学生数は約10,400人だった。その中でも、グラウンドでプラスチックの穴あきボール(無風で30y程度)だけを使用してショット練習を行う授業、また一方ではフライトボールなど穴あきボールよりは少し距離の出る(無風で9I、80y)ボールを使える場合、パターやショートアプローチのみ本物のゴルフボールを使用する場合、雨天時にパターマットもしくは絨毯敷きの多目的ルームなどでパッティング練習が行える場合、雨天時は教室やAVルームなどでレクチャーを行う場合など、各大学の施設と教材によって内容の差はあった。

② 学内授業 + 打ちっ放しゴルフ練習場型

授業の中で「打ちっ放しゴルフ練習場」に連れて行けた学生数は約2,400人だった。こちらはグラウンドでの15回もしくは30回の授業の中で、半期もしくは通年に対して1回～2回の頻度で「打ちっ放しの練習場」に行ったケースである(予算は全額学生自己負担、もしくは大学予算から半額負担、もしくは大学予算から全額など様々であった)。このような形態で指導した学生数をグラウンドだけで完結したケースと比率で表すと、 $2,400/10,400$ 人となり、全体の23%だった。

③ 学内授業 + ショートコース型

授業の中で「ショートコース」まで連れて行けた学生数は約2,000人だった。更に、「打ちっ放し練習場」+「最終授業日などにショートコース」、または「合宿スタイルでのショートコースラウンド」形態で授業を行った学生数が $2,000/10,400$ 人となり、全体の19%だった。

④ 学外集中本コース型

学外集中授業などで「ゴルフ場=本コース」まで連れて行けた学生数は $150/10,400$ 人となり、全体の比率で見ると僅か1.5%であった。

このように最終的に「ゴルフ場」まで連れて行く学生が極端に少ない(=授業として実施するにはハードルが高い)理由として、ゴルフ場でプレイさせるための学生用経費(プレイ費、交通費、食費、合宿の場合は宿泊費、ラウンド用ゴルフクラブ、ボール、ティ、ゴルフシューズ、ウェア)、指導者の確保(専任教員がゴルフの指導が十分できるとは限らない)、指導者の経費(手当、宿泊やラウンド経費)を学生の自己負担でどれだけまかなうかという点と、または、大学予算からどれだけ支出できるかという点が第一にあげられる。

費用と関連して利用するゴルフ場のグレードや使い勝手も重要である。良いコースはプレイ費が高い

し、学生合宿お断り（メンバーや一般客が多い）や初心者ゴルファー（マナー）に厳しい。一方、安価優先にすると、場所のアクセスが悪い＝交通費が高くなる、コースが狭くトリッキー、アップダウンがある、メンテが悪い、練習場が無い、食事や宿泊施設に問題がある、等々、何かしらの問題がある場合が多い。

すなわち指導者としては、できるなら学生をゴルフ場に連れて行きたいものの、まずプレイ費用が高い、コースまでのアクセス（時間と費用）、クラブ、ボールなどの経費の問題、指導者の数（経費が嵩む）がハードルを高くしている。

これらを解決する方法としてゴルフ場側に理解していただきたいのは、現在ジュニア（高校生）までの優待金額を大学生まで広げてもらいたいことである。また、引率指導者のプレイ費を優待して（一部のコースでは無料）もらいたいこと。さらにはコース側で HALF セットなどを貸与してもらえると、こちらでクラブを用意しなくても良いし、クラブの輸送コストも抑えることができ、より手軽になる。

このように、ゴルフ場側が大学生に対してできる範囲での優待をしていただければ、ゴルフ授業担当教員が学生をゴルフ場に連れて行けるハードルを下げることに繋がると思われる。

とはいえ、学生をゴルフ場にデビューさせるにはプレイファーストや服装のマナー、危険防止、ルールに関する事前指導が必要であり、技術的にもフルスイング、コントロールスイング、パッティングなどの事前実技指導も必要であろう。さらに、宿泊を伴う合宿スタイルとなると専任教員の同伴が必要となる。すなわち、専任教員がゴルフ授業に対してどの程度まで積極的に関わることができるか（専任教員自身がゴルフ指導者となることが望ましいが簡単ではない）が重要であり、専任教員がゴルフ授業に対して必要性や教育効果を感じ、「ゴルフ場へ連れて行く」といった「高度な授業」を行おうとするか否かに左右される。

このように、現状ではゴルフ場を利用しての授業は、最もハードルが高いものの、ショートコースとなると、日帰りまたは大学周辺に徒歩で行ける立地的な背景があると授業に組み込まれる可能性が出てくる。麻布大学の場合、使用したショートコースが淵野辺キャンパスから学生が自転車で20分の場所であったことなどから、専任教員の判断で授業の最終日に組み込まれた。施設利用料は1周7ホールで1人当たり1000円であり、全額学生負担としていた。ただし、住宅内の一角にある、そう広くないショートコースであり、さらに貸し切りでなく一般客に混じってのラウンドであったため、指導者としては安全管理やマナーに神経をかなり使った。

また、同大学の場合、打ちっ放し練習場は大学敷地から道路を隔てた徒歩1分のところにあった。打ちっ放しの授業は前期1回、後期1～2回であった。学生負担は1回につき500円で、大体の学生が時間内に2籠100球程度、金額にして1000円程度の貸しボールを打ったので、半額大学負担というスタイルだった。学生は半額自己負担であったが、この「打ちっ放し練習場」での授業を大変楽しみにしており、この授業の出席率は極めて高かった。

いずれも予算や施設、スペースなどから専任教員と相談して授業形態が決まっていくものであり、予算が豊富で非常勤講師の要望どおりの授業が展開できるケースはほぼ無いといえる。

また、最初はグラウンドだけの授業であったが、授業の実績や専任教員のゴルフ授業に対する理解度の向上に乗じて、その後打ちっ放しやショートコースへと発展していったケースなどもあった。

2) 複数の大学教育経験からみるゴルフ授業の課題と解決策

課題① ゴルフ授業に対しての予算不足

大学体育では限られた年間教材費の中から多項目開講しており、1種目に宛てられる年間予算は

数万円～多くても20万程度と思われる。したがってゴルフ授業を開講する際に最もネックとなる部分が学生用教材費となるゴルフクラブ・ボール・マット類であろう。中でもゴルフクラブは中古であっても安価ではない。また、学生が使用するとすると消耗も激しい。数年間使用するならグリップ交換も必要となり経費がかかる。この課題の解決策として2016年からゴルフ用品界、大学ゴルフ授業研究会、大学体育連合を通じて、中古ゴルフクラブの配布が各大学に始まった。このことは大学でゴルフ授業を担当する教員にとって革新的に大きな出来事である。中古といっても実際に支給されたクラブは数年前の試打クラブや殆ど新品同様のクラブも含まれて配布されている。真新しいクラブを使えることになった学生の反応も顕著であり、学生の授業に対してのモチベーションがかなり高くなっていると感じているゴルフ授業担当が多い。このクラブ配布活動を授業担当者は大いに利用させていただくと共に引き続き業界からの支援をお願いしたい。

課題②コースデビューまでの障壁と対策

本来コースで行うのがゴルフである。担当教員にはグラウンド→練習場→ショートコース→ゴルフ場へと段階的に授業内容を展開できるように模索していくことが求められる。

グラウンドの授業から打ちっ放しの練習場、更にショートコース、そして最終的にはゴルフ場へと発展させていくためには、大学近郊にそれぞれの施設があるか、また、貸し切りや割引など、それぞれの施設から優待や協力が得られることも大事である。

また、教員は学生の自己負担が発生する場合には授業最初の種目選択の段階で費用について具体的に説明しておくべきである。シラバスだけでは経験のないスポーツに対して学生は具体的なイメージを抱くことができない。学生が授業内容

に対してイメージを湧かせることができるように、教員側が上手にプレゼン(内容と成果、楽しそうな様子などを写真や動画などで伝える)すれば自費(単に安いだけでは自費参加しない)参加も可となるであろう。2015年から始まったGちゃれ、ゴルマジ(19歳,20歳のゴルフ練習場、ゴルフ場無料)も学生のゴルフ練習場、ゴルフ場デビューを後押ししているのも、さらなる宣伝、普及が期待される。

また、ゴルフ場側には初心者の学生に対して、最終組でのプレイ(＝時間で撤収するなどして、できるだけ従業員の負担を少なくする工夫)、数ホールの貸し切りなど、学生を時間で追い立てない方法で、初心者を取り込んでいく利用法に関する理解と協力もお願いしたい。

課題③学内授業の工夫

グラウンドのみの授業でゴルフ本来の醍醐味をいかに伝えるか、学生を失望させない授業内容の工夫が必要である。この課題を解決するためには指導者の指導力向上や、臨場感を与える工夫が必要であろう。

a)他機関との連携

大学ゴルフ研究会などで授業アイディアなど共有する。PGA、大体連からの技術指導を受ける。

b)授業早期にゲーム(グラウンドに模擬コースを作る)の実施。

具体的には、ベストボール方式から習熟度に合わせて徐々に個人プレイなどへ移行し個別にハードルをあげる(池,OB、プレイしながらのマナーなど実践)。

c)難易度の調整

ゴルフは本来非常に難しいスポーツであるが、授業で難しすぎると学生は諦めたり失望したりする。その解決策として→本来難しいゴルフをできるだけ優しくする用に工夫する。例え

ばクラブはできるだけ短いクラブを使用する。またはクラブを短く持つ。更に重いクラブより軽いクラブを使用する。ティアップをする。ショートゲームやパターを重点的に指導する。市販されている練習器具を活用する。習熟度分けをして、チーム毎にテーマを決めた指導をする。

授業が単調にならないよう飽きさせない工夫として、グリップテストやスイングテスト・個別課題に対してテストをすることで学生の反応が良くなる。また、ビデオ撮影をしてフォームの習熟度を確認させる。2人一組のバディシステムを利用して課題に対してお互いチェックするなどが効果的である。

課題④大学ゴルフ授業での指導（適正）人数

授業依頼側からは「何人できますか」や「30人～50人担当していただきたい」などと希望されると思うが、実際に履修者の殆どが初心者であるゴルフ授業において多人数の指導は難しい。ゴルフは安全への配慮の度合いが他のスポーツより大きい。大人数での授業はできないこともないが授業内容に制限が加わる。筆者は過去に最大で70名のクラスを担当したことがあるが、35打席の2人組、交代制とし、安全性への配慮が最重点となり個別指導がほとんどできなかった経験がある。

施設とスペースに寄るが、一般的なグラウンドでは授業担当者側としては20名程度が望ましい。さらに指導者が経験不足なら12名以下からスタートして経験を積んだのち20名程度を指導できるような形態が望ましい。

ゴルフ練習場を利用するなら1打席1人が望ましいが、1打席2人、10打席20人までなら適正ラインだと思われる。1打席2名の場合、交代の際の安全確認や打つ人以外が打席に立ち入らないなどの注意を徹底しなくてはならない。ゴルフ場利用ならステーションであれば1班10名前後、ラウンドプレイであればメイン指導者の他、1組に1

人の補助員（TA）がほしい。カート操作は基本的に学生が行うべきではない。カートを使用しないでミニケースで数本もたせて徒歩にてラウンドさせるのがベターだが、夏期熱中症予防の見地からカート利用をするなら、カート操作のため学生以外の補助員を付けた方が安全である。

【おわりに】

最後に、ゴルフ業界全体として大学ゴルフ授業を応援する体制が始まりつつある今、大学ゴルフ授業研究会は業界とコラボして世話人1人1人が大学ゴルフ授業の充実とゴルフの普及に協力していくことが期待される。

【資料】

学生にゴルフを教える

ープロゴルファーとしての授業展開例ー

桜美林大学非常勤講師 立命館大学客員研究員 プロゴルファー
野澤 むつこ

キーワード： ゴルフスイング、ゴルフゲーム、ボール、プロゴルファー

【はじめに】

筆者が担当している桜美林大学でのゴルフの授業は、プロフェッショナルアーツ・ビジネスマネジメント学群・マネジメント学類フライトオペレーション(パイロット養成)コースの学生を対象としている。このコースは2008年に開設され早10年が過ぎようとしており、世に多くのパイロットを送り出している。筆者がこのコースの授業の依頼を受けた時、10代の若者が夢に向かって頑張る姿を、プロゴルファーを目指していた若い頃の自分と照らし合わせ、授業を通して学生と共に過ごしてみたいという気持ちから担当を引き受けることとした。

パイロットは決められた滑走路から離陸し、目的地に着陸するという正確な操作を求められる。これは機体をコントロールし、最大限の安全性を確保し、得られた情報を整理しながらの操作をすることが求められる。筆者は航空関係のことは全く知らない。ゴルフは狙ったところにボールを運び、数少ない打数でホールアウトするゲームであることだが、一打たりとも同じ状況ではなく、その場の状況判断により遂行される動作が決まる。このようなことから、状況判断に正確性を求められるパイロットの機体操作と、何故だかゴルフに似ているような気がしてならない。

本報告については、プロゴルファーとしてのゴルフ指導の経験に基づき、大学の授業環境や初めてゴルフに接する受講生を対象としての授業の展開について述べるものとする。

【対象学生について】

一般的に大学での授業は必修科目以外の単位取得は選択制となっている。しかしながら、担当しているフライトオペレーションコース(以下、FO)の学生はその自由はなく、全ての学生がゴルフを履修することが決められている。意欲的に取り組む者、新たなスポーツとして体験する者、多種多様な思いで授業が始まることは言うまでもない。ゴルフの授業は1年生の後期に開講されるが、この学生とは前期にトレーニングという授業を通して、1年間担当することとなっている。その為、学生の運動歴などを把握している。個々の運動歴を活かせるよう、動作の特徴を他のスポーツ動作を例に挙げ、学生がゴルフ動作を理解できるような説明を心がけている。

【講義の目標】

本講義で掲げている目標は2点ある。

1. 道具と使用球の理解
2. ゴルフゲームの理解

この2点が達成されるような講義を展開することを心掛けている。いささか低い目標だと思われるが、まず1の道具と使用球について説明する。

ゴルフはルール上使用できるクラブの本数は14本である。最も遠くにボールを飛ばすことが出来るドライバーから、最終目標となるカップにボールを転がし入れる為に使われるパターを含めての本数が14本と定められている。授業では全てのクラブを使用することは不可能であることは言うまでもない。

しかしながら、それぞれのクラブの名称や長さ、ロフト（打球面の角度）などの違いが、飛球の違いを生み出していることを理解させたいと筆者は考えている。

また、学内の使用可能な場所の環境により、使用するボールが異なる為、プラスチックやウレタンで出来た模擬球や実球の違いを知ることによって打球による事故が防げ、安全に授業を進めることが可能となる。

次に2として掲げたゴルフのゲームに対する理解が深まることでより一層ゴルフを身近に感じられると考えている。ゴルフはトーナメント中継などテレビなどで目に触れる機会が多くある。また生涯スポーツとして幅広い年齢層でゴルフが行われている状況下で、社会に出た後にゴルフをする機会もあると考えられる。ルールを知り、ゲームが行われているコースの特徴などが分かることで多面的に楽しむこともできるであろう。

このような考えから2点の目標を掲げ、授業を展開している。さらに、受講生が将来的にゴルフを再開する場合に必要な最低限の知識を習得させたいと考えている。

【授業の展開例】

1. グリップと模擬球での練習

ゴルフの熟練者でさえ、グリップは常に安定した状況を保つことは難しいことである。身体と道具であるクラブをつなぐ接点であるという点から、動作を妨げずボールに正確に当たり、ボールを飛ばす為に必要なエネルギーを伝達できるグリップが望ましい。基本となる3種類のグリップ方法（インターロッキング・オーバーラッピング・ベースボール）から本人に選択させる。ただし、右利きの者は左手が上になり、左利きの者は右手が上になることだけは正確に行わせるように伝える。

次にどのくらいの力でグリップを握れば良いかを指導しなくてはならない。まずはグッと力強く持たせ、10からカウントダウンしていき、少しずつ力を

抜き、最終的にクラブを保持できるようにさせる。あまり強く握りすぎると手首の自由度がなくなり上肢全体が硬直することを知ることが出来る。この練習は何度か繰り返し行い、学生はグリップになじみ、左右の指の位置関係が理解できるものと思われる。また、コックと言われる手首の動きもこの段階で指導するようにしている。左右親指がクラブ全体の重さを感じられ、ここで感じた重さがボールを飛ばす力になり得ることを体感させることが目的である。

道具を振ることに慣れていない学生はどうしても上肢に力が入ってしまう。このことを防ぐためにもカウントダウンによるグリップ力の調整法は有効であると考えられる。

グリップに慣れたところで、模擬球によるアプローチを行わせる。スイング技術獲得の導入においてアプローチの指導から始めることは、スイングもままならない初心者には難しいかもしれない。しかし、振り子の動きからクラブがどのように動いていくかを理解させるためには、まずは小さな動きから指導する。

アプローチにおけるボールの位置とクラブの関係は時計の文字盤に置き換えて説明する。ボールはクラブの動きの中の最下点である6時の位置に置き、右方向は9時、左方向は3時と規定する。一番小さな動きは7時-5時の振り幅となる。この時はグリップをしっかりと握るように注意する。身体は下肢の動きを出来るだけ抑えて、肩と両腕で出来る三角形を維持した状態で7時-5時のスイング幅の素振り練習を行わせる。

次はマット上に模擬球を置き、7時-5時のスイング幅で振り子をイメージさせた動きを行わせる。模擬球はクラブフェースに当たりさせずれば、簡単に飛球方向へ飛び出していく。徐々に振り幅は大きくしていき、8時-4時、9時-3時の振り幅に移行していく。いずれも左右均等の動きを心掛けさせ、スイングのスピードについても同速でクラブが動くことに意識を向けさせる（図1）。



図1. 模擬球での練習風景

2. 実球への移行練習

実際にゴルフで使用される球は小さくて硬いものである。打球事故が起こらないようにする為には、実球に良く慣れさせることが重要だと考えている。

パッティング練習がまず初めに実球に触れる練習として採用している。授業の初期段階で行い、ボールに対してパターがまっすぐ当たることを意識させ、50cm, 1m, 1.5mの距離に対しての振り幅の調整が出来ることを課題としている。また3人組になり、50cm, 1m, 1.5mを次々にカップインさせるゲームは何度も練習を重ね、1グループ毎に皆の前で披露させる。ゲーム性が取り入れられ、学生らの協調性が生み出されているように思える（図2）。



図2. グループ練習（50cm, 1m, 1.5m）

ゴルフボールはディンプルという丸いくぼみが表面に存在する。このディンプルを活かし、ボールを積み上げることが可能である。最初に2個のボールが積み重なると、さらに3個4個と数を増やしてい

く。学生は実球に触れることで、使用ボールの形状が理解できる。さらに集中力が養われる効果も期待できる。

パイロットを目指す学生はある程度の身体能力を持っている。その為、中学高校とスポーツ経験が全くないという者は存在しない。特に近年サッカーを経験してきた学生が多いことから、ウェッジを使い実球のリフティングを行わせている（図3）。フェース面でのボールの弾む感触が手に伝わり、その弾みに身体の動きも合わせるような動きが上達のサインとなる。

このように実球を使用したパターやウェッジとのボールの接触が打球の感覚を掴む第一歩になると考えている。



図3. ウェッジと実球によるリフティング

3. 実球の練習

本学のゴルフ練習場は打席から至近距離にある急斜面に向かってボールを打つので、ボールが思わぬ方向へ跳ね返り、非常に危険な状況下での授業を強いられている。その為、授業の大半は体育館で実施している。

スイングの練習はウェッジから7アイアン、その後ドライバー、徐々に長いクラブへ移行させる。これらのショットはいずれも模擬球を使用しての練習となるが、実球での練習が不十分である。

このような状況を改善するために、体育館内の一角を利用し、ウレタンマットを敷きつめ、目標となる

よう三角コーンを置き、ランニングアプローチを主体とした練習が出来るように工夫した（図4）。



図4. ウレタンマットの準備風景（上段）
実球でのアプローチ練習（下段）

4. 講義の内容

本講義の目標として「ゴルフゲームの理解」を掲げている。どのようなスポーツであってもルールは存在するが、ゴルフはレフェリーがゲーム中に常時立ち会わない特殊なスポーツである。それは、ゴルフはフェアプレーを重んじるスポーツであり「ゴルフファーマイナ誠実であり、故意に不正をおかす者はいない」ということが基本的考えになっているとルールブックの冒頭に記されている（ゴルフ規則から抜粋）。

それ故、プレイヤーはルールを熟知し、自己責任においてゲームを遂行しなければならないことを学生に理解させなくてはならない。実際にコースでの実習は現在行われていないが、学生らが将来的にゴ



図5. ゴルフコースとスコアの説明

ルフに接することがあった時に困らないように指導したいと考えている。

ゴルフは18ホールを1つの単位としてゲームが行われている。ひとつのホールの長さはそのホールの規定打数を決める条件のひとつであることから、両者の関係を知ることでゲームについてさらに深く理解できると思われる（図5）。

スコアカードに記載されているホールの距離や規定打数がホールの難易度など把握することが可能となる。しかしながら、コースのラウンド実習が行えないことから、スコアの書き方を座学にて指導することとしている。

スコアはそのホールでの打数の数字を他のプレイヤーに伝えることもあるが、スコアの名称で伝えることもある。筆者はゴルフをテレビ中継で見た時、解説者が言うスコアの意味が分からず、どの選手が良いプレイをしたのか分からなかったことがあった。

例えば1人のプレイヤーが「パー」と言っても、Par 3のホールとPar 4のホールでは数字が異なる。それ故、スコアカードへの記入方法を知ることがゲームの理解にもつながると考えられる。

講義では、架空のゲームを想定し、スコアを名称で読み上げ、学生らは図6のスコアカードの空欄に数字を記入していく。18ホールの読み上げが終了した時点で、1ホールのスコアとトータルのスコアが正確に書かれているかを確認させる。

スイングの技術もさることながら、学生らが将来コースに出た時に困るようなことを想定しての指導内容を構成していくことが重要である。

Competition name										Date / /		Player name										handicap		C-B-R-G-L													
HOLE												1	2	3	4	5	6	7	8	9	OUT	10	11	12	13	14	15	16	17	18	IN	TOTAL	OUT	NET			
Champion Black												458	405	372	173	560	510	431	152	440	3,501	396	448	538	192	376	427	430	200	586	3,593	7,094					
Black Gray												406	386	361	159	523	487	409	138	393	3,262	376	421	500	188	333	411	400	181	529	3,322	6,584					
Regular Sepia												376	360	322	140	504	472	384	122	373	3,053	354	390	472	136	312	380	389	164	503	3,100	6,153					
HANDICAP												8	3	13	15	1	7	5	17	11	3	16	10	15	18	3	6	14	12								
PAR												4	4	4	3	5	5	4	3	4	36	4	4	5	3	4	4	3	5	36	72						
松山 秀樹												4	3	4	2	3	5	4	3	4	32	5	3	4	3	4	5	4	3	4	35	67					
野澤 友二												4	5	4	3	4	5	6	3	4	38	4	5	5	3	5	4	6	2	5	39	77					
Gold Yellow												376	360	322	125	504	472	384	122	347	3,012	354	367	472	136	312	380	309	164	503	2,997	6,009					
Ladies Red												350	327	251	122	427	414	316	120	319	2,640	286	330	380	116	289	337	280	147	473	2,636	5,276					
Marker's Signature																						Player's Signature										Birth of Date		年 月 日			

図6. スコアカード記入

5. 課題提出

担当しているFOの学生には「ゴルフボールと飛行機が飛ぶ原理について」のレポートを提出させている。筆者は航空機についての知識は全くない。しかしながら、空気中を動く物体に対して気流が作用するということは理解している。ゴルフボールと飛行機という2つの物体に共通する空気抵抗や揚力が作用することを理解し、流体力学という知見を広げることが課題提出の目的となっている。

学生の専攻している学科の専門性に対して、いかにその学びとスポーツを結びつけていくか、指導する者はその要求に答えていかななくてはならない。課題は毎年同一のものとしているが、提出される内容は年々充実してきているように見え、学生の意見や考え等が含まれるようになってきている。

【授業の問題点】

1. 安全性と道具の取り扱い

先にも述べたが、本学のゴルフ打球場は劣悪な環境である。一般のゴルファーは近距離にそびえ立つ壁のような傾斜地に向かってボールを打つことなどはない。実球でのショットの練習を学生らに多く体験させたいが、望ましい環境とは言いかねる。過去

に壁に跳ね返ったボールでの打球事故は発生せずにきており、幸い室内での打球事故も発生していない。

授業開始時には必ずクラブを振ることが出来る範囲の把握、ボールを床に落としての跳ね返りの勢いなどを体験させることで、学生らに注意喚起を行うようにしている。



図7. 破損したクラブ

さらにクラブ等が自己保有のものではないという点から、道具に対しぞんざいな扱い方になっている。その結果、クラブの劣化も重なり、図7のようにドライバーがシャフト部分から、もしくはネック（クラブヘッドとシャフトの連結部）から折れることが多くある。こちらについても事故に及ばなかったものの、今後の注意事項として取り上げていく必要があるだろう。

2. ゴルフ技術の到達点

本学科の学生は2年生の後期からアメリカでフライトトレーニングをする為、他の学科の学生と異なるカリキュラムが組まれている。さらには選択制ではないので、授業は毎日あり、空き時間が見当たらない。過去には学科の先生方にお手伝いして頂き、コースでの実習を行ったこともあった。しかしながら、現在では残念ながら実習が組める状況ではない。本来ならば、技術習得の到達点として“Gちゃれ”に参加するなどの経験をさせたいと考えているが実

現に至っていない。

本授業は、クラブを握りボールを打ってみるという位の体験にならないよう、スイングに対する注意点として、個別にアドバイスを与えるよう筆者は心掛けている。スイング理論は統一されたものであっても、スイングは個々に違うと考えるからである。

ゴルフは道具を使用するスポーツである。このことを踏まえて、リズム良くスムーズにクラブを振ることを最終的な目標としている。それは、ゴルフスイングは多関節運動であると言われていることから、全身をコントロールする動きが出来ているかどうかがスムーズな動きとして現れるからである。飛距離や正確性などを評価の対象とせず、スムーズな動きと正確なインパクトが出来れば、おのずと2つの課題がクリアになるからである。しかしながら、ゴルフ技術の習得の到達点を明確にすることが今後の課題と考えている。

【最後に】

冒頭でも述べたが、筆者はプロゴルファーである。一般的にゴルフの専門家として認識されているかもしれないが、大学でのゴルフの授業を担当することは単にゴルフのゲームをするだけでなく、多くの知識を身に付けなくてはならないことを知った。

グリップという言葉をとっても、クラブを握る部分を示し、握ることをグリップすると表現するなど、言葉ひとつの説明が必要となる。なんの知識も持たない学生達が理解できるような説明をしなくてはならない。初めてゴルフをする人に対する理解できる言葉選びが大切だということを、本授業で筆者は学ぶことが出来たと思っている。

ゴルフは誰の力を借りず、また他のプレイヤーからの接触や妨害がない。全て自らの力で対処するメンタリティーの高いスポーツである。授業においてメンタルタフネスの向上が期待できる内容が含まれるように工夫することで、アクティブラーニングとしてさらに良い教科となり得るだろう。

筆者はプロフェッショナルとして、ゴルフ技術の評価などに対して厳しい目も持っていることは事実である。しかしながら、スイングはこうあるべきという厳格さよりも、楽しくゴルフを体験させ、社会人となった時に授業での経験が役立てるような授業内容を構築していくように今後も努力していきたいと考えている。

【資料】

学期途中のGちゃれ開催の試み

－関西初の武庫女Gちゃれの実践から－

松村公美子（武庫川女子大学 非常勤講師）

キーワード：Gちゃれ、武庫川女子大学、武庫女、女子大生、ゴルフ授業、ゴルフ、ゴルフ場

24

【はじめに】

Gちゃれとは「多くの大学でゴルフは教材とされているものの、その殆どは学内での打ちっ放しで完結しているため、受講生たちにゴルフ場でのプレーを体験させる」のが目的であり、「正課教育で学んだ知識や技術を、実際の現場で実践する正課外教育プログラム」である¹⁾。

・企画名称『Gちゃれ』（ネーミングは、武蔵野美術大学の北徹朗先生が考案）

「GちゃれのGは、Golf、Green、Gentleman、Grass、Grace、Good Golfer など、ゴルフに関連する用語をイメージしている」と記載されている¹⁾。

【関西初のGちゃれ開催】

武庫川女子大学にてゴルフ授業を選択している受講生を対象に、関西初のGちゃれを下記の通り実施した。

- ・日程：2016年12月26日（月）
- ・場所：有馬カンツリー倶楽部
- ・名称：第1回武庫女Gちゃれ
- ・参加者：16名
- ・参加費：2500円（昼食込）

【目的】

Gちゃれのシステムを活用し、受講生たちにゴルフ場体験をさせることを目的とした。

また、実施日の12月26日は、後期の授業が終わっておらず、学期途中での開催であったが、この学期途中に「ゴルフ場体験」をさせる意図としては、「授業カリキュラム（15回）の概ね中間地点でのゴルフ場体験（課外学習）により、本物のイメージで残りの授業を受講させる」とこと「ゴルフの理解が深まり、継続意欲なども高まるのではないか？」と思われたためである。

【調査の概要】

学期途中で「Gちゃれ」に参加したことによって、受講生たちのゴルフに対するモチベーションは、どのように変化するかを調査するために、武庫川女子大学で2016年度後期の「ゴルフ実技」を受講した全受講生を対象に、最終授業時（1月）にアンケート調査を実施した。

尚、このアンケートは、武蔵野美術大学の北徹朗先生により作成されたものである。

＜分析対象＞

最終授業日出席者全員（回答者数…66名）

＜データの内訳＞

- ・「Gちゃれ」参加者：13名【参加群】
（Gちゃれに参加し、最終授業を欠席した者3名）
- ・授業参加のみの受講生：53名【不参加群】

【調査結果】

Q1. ゴルフ授業は楽しかったか

	参加群	不参加群
大変楽しかった	100%	64. 2%
まあ楽しかった	0%	33. 9%
どちらとも言えない	0%	1. 9%
あまり楽しくなかった	0%	0%
全く楽しくなかった	0%	0%

Q5. ゴルフは楽しいと思うか

	参加群	不参加群
大変楽しいと思う	69. 2%	47. 1%
まあ楽しいと思う	30. 8%	50. 9%
どちらとも言えない	0%	2. 0%
あまり楽しいと思わない	0%	0%
全く楽しいと思わない	0%	0%

Q2. ゴルフ技術は上達したと思うか（自己評価）

	参加群	不参加群
大変上達したと思う	46. 2%	45. 3%
まあ上達したと思う	53. 8%	50. 9%
どちらとも言えない	0%	3. 8%
あまり上達しなかった	0%	0%
全く上達しなかった	0%	0%

Q6. ゴルフをすることで他人との交流は深まると思うか

	参加群	不参加群
とても深まると思う	23. 1%	24. 5%
深まると思う	69. 2%	54. 7%
どちらとも言えない	7. 7%	20. 8%
あまり深まると思わない	0%	0%
全く深まると思わない	0%	0%

Q3. TV やネットなど、ゴルフ情報を見るようになったか

	参加群	不参加群
以前より見るようになった	61. 5%	47. 1%
以前と変わらない	38. 5%	52. 9%

Q7. 「ショット」「アプローチ」「パター」のうち最も得意なもの

	参加群	不参加群
ショット	69. 2%	75. 5%
アプローチ	23. 1%	15. 1%
パター	7. 7%	9. 4%

Q4. 今後もゴルフを続けたいと思うか

	参加群	不参加群
とても続けたいと思う	30. 8%	16. 9%
続けたいと思う	69. 2%	52. 8%
どちらとも言えない	0%	30. 3%
あまり続けたいと思わない	0%	0%
全く続けたいと思わない	0%	0%

Q8. 「ショット」「アプローチ」「パター」のうち最も苦手なもの

	参加群	不参加群
ショット	7. 6%	7. 5%
アプローチ	23. 1%	33. 9%
パター	60. 3%	58. 6%

Q9. ゴルフの用具（クラブなど）が欲しいと思うか

	参加群	不参加群
とても欲しいと思う	15.4%	15.0%
欲しいと思う	76.9%	37.7%
あまり欲しいと思わない	0%	39.6%
全く欲しいと思わない	0%	7.5%
※買った※	7.7%	—

Q10. ゴルフマナーは理解できたか

	参加群	不参加群
とてもよく理解できた	7.8%	15.1%
よく理解できた	92.2%	84.9%
あまり理解できなかった	0%	0%
全く理解できなかった	0%	0%

Q11. 今後「Gちゃれ」のようなイベントに参加したいか

	参加群	不参加群
とても参加したい	53.8%	24.5%
参加したい	46.2%	50.9%
参加したいと思わない	0%	18.8%
全く参加したいと思わない	0%	5.8%

Q12. ゴルフの魅力・楽しさ（自由記述・主なもののみ）

＜参加群＞

- ・コースに出ると景色がキレイで空気もキレイでストレス発散になる。打ちっぱなしでは上達するために練習するとき夢中になるから楽しい。
- ・ゴルフを通じて親世代や社会人との共通の話題ができ、ゴルフに誘われるようになった。
- ・思っていた以上に頭を使うスポーツでした。クラブの向き、傾け方、斜面、風向きなど感覚と技でした。一見とても難しそうだが練習すれば誰でもうまくなれるところです。
- ・年齢が上がっても続けやすいスポーツだと思うのでずっと続けられる。

- ・練習成果が出るところ。広い場所で行う爽快感。

＜不参加群＞

- ・走りなどが苦手な人とか軽くスポーツを楽しみたいという人に適正だと思う。
- ・自分と戦うスポーツだと思う。1人でも楽しめる。遠く飛ぶとうれしい。
- ・激しすぎないところ。
- ・人とコミュニケーションが取れるところ。生涯スポーツで幅広い年代の人が楽しめるところ。
- ・飛距離を考えて打っていくところ。
- ・棒を振り回すこと。
- ・当たるときの音！
- ・スイングの上達でボールが遠くに飛ばせるようになっていくところ。

【結果】

アンケート結果を見ると、「Q1. ゴルフ授業は楽しかったか」「Q3. TVやネットなど、ゴルフ情報を見るようになったか」「Q4. 今後もゴルフを続けたいと思うか」「Q5. ゴルフは楽しいと思うか」「Q9. ゴルフの用具（クラブなど）が欲しいと思うか」など、ゴルフへの積極性・モチベーションを問う質問に対しては、Gちゃれ参加群の方が不参加群に比べて、ポイントが上回ったことが分かる。

また、「Q6. ゴルフをすることで他人との交流は深まると思うか」「Q10. ゴルフマナーは理解できたか」などは、実際にゴルフ場でのプレーを経験したことによって、ゴルフへの理解度が深まったのではないかとと思われる。

【考察】

ゴルフに関心や興味を持っていた受講生がGちゃれにも積極的に参加したが、このアンケート結果を見る限り、大学授業へのGちゃれ導入は、下記のような効果が期待できると思われる。

- ・ゴルフ場に対する親しみが増す。

- ・ゴルフやゴルフ場に対する関心を高める。
- ・ゴルフ継続意欲を高める。
- ・ゴルフを媒体として、人（両親・友人）との会話が増える。
- ・大学生活の中での良い思い出のひとつ。
- ・受講科目のひとつから趣味への転換がスムーズ。

受講生たちにとってゴルフ場は、「大人がプレーするところ」との印象が有り、敷居を高く感じるようであるが、当日のGちゃれ参加者の気分の高揚は、まるでTDLやUSJにてアトラクションを楽しんでいるかのようであった。参加者たちの、その楽しそうな表情を見るのは、とても嬉しく、開催場所となった有馬カンツリー倶楽部の方々のご理解やご協力が有ったのことに感謝した。

このように、Gちゃれは、受講生たちのゴルフに対するモチベーションを上げるものとして機能しうであるが、今後の課題として、武庫川女子大学においては成績に関与しない課外実習となるため、受講生たちの参加意欲の向上と、参加しやすい日程調整が必要となる。春休みや夏休み期間を利用したの実施の検討と、参加意欲を向上させるための方法の模索、そして、過去に授業を受けた受講生たちへのGちゃれ開催日程の告知を、どのようにおこなうかが継続的な実施のための課題である。

【文献】

[引用文献]

- 1) 大学ゴルフ授業研究会：課外教育プログラム「Gちゃれ」大学ゴルフ授業研究会ホームページ，
URL：<https://daigaku-golf.org/g-challenge>.（閲覧日：2017年3月1日）

資料

【資料】

JGGA からのゴルフ用品提供の申請状況と

大学ゴルフ授業の課題

高橋宗良（鎌倉女子大学）

キーワード：大学ゴルフ授業、ゴルフ用品提供、ゴルフの継続

28

【要旨】

2016年、大学ゴルフ授業の充実を目指し、全国大学体育連合、日本プロゴルフ協会、ゴルフ市場活性化委員会の三者が産学協定連携を結んだ。その中には、日本ゴルフ用品協会が大学ゴルフ授業に対してゴルフ用品提供をしていくことが含まれている。そこで、本稿ではゴルフ用品提供の申請状況、受講生の提供クラブに対する反応、および受講生のゴルフ継続可能性の3つの視点から、本事業の課題について検討した。

その結果、提供されるクラブは7番アイアンが圧倒的に多いことが明らかとなった。需給にはミスマッチが生じているものの、供給量の実態を受け7番アイアンを使用するゴルフ授業の開発を進める必要性が示唆された。

また、ゴルフの継続については、53.9%の受講生がゴルフ継続に前向きであることが示された。その理由として「楽しい」ことを挙げている。ゴルフ授業における楽しさを明確化することによって、受講生のゴルフ継続率を向上させ得ることが示唆された。

1. 背景

2016年6月27日、大学ゴルフ授業を充実させる目的で、(公社)全国大学体育連合(大体連)、(公社)日本プロゴルフ協会(PGA)、ゴルフ市場活性化委員会(GMAC)が産学連携協定を結んだ。この協定の中には、(一社)日本ゴルフ用品協会(JGGA)に加盟するゴルフ用品メーカー各社による大学ゴルフ

授業に対する用品(クラブ)提供事業があり、大体連会員校のうちゴルフ授業を展開している大学にゴルフクラブを提供することとなっている。これにより、大学としては無償(送料のみ負担)でクラブの提供を受けることができ、ゴルフ授業を充実させることが可能となった。

実際の用品提供の概要については、図1に示したとおりである。提供されるゴルフクラブは、メーカー各社が、主として試打クラブとして用いたものであり、大学の要望を受けて提供することとなっている。メーカーと大学の両者を取りまとめるために、メーカーサイドにはJGGAが、大学側には大学ゴルフ授業研究会が調整役として入り、需給調整と手続きを行っている。産業廃棄物が教材となるため、メーカー大学双方にとってメリットがある画期的なスキームであると考えられている。

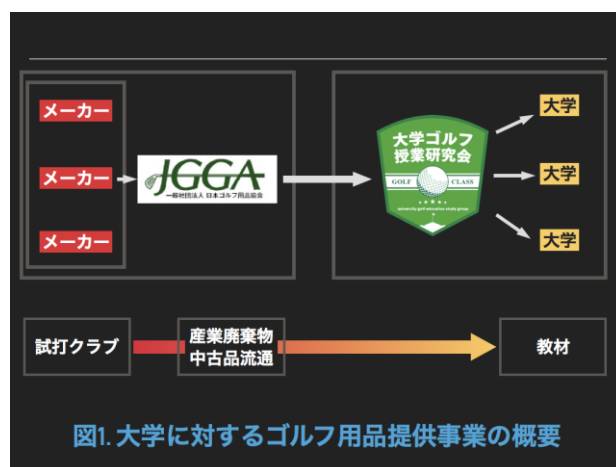


図1. 大学に対するゴルフ用品提供事業の概要

大学が用品提供を申請するための要件については、表1にまとめた通りである。なおここに挙げた要件は全て大体連の意向によるものである。

表1. ゴルフ用品提供申請要件*

▶対象（以下の要件を全て満たすこと）

- ▶ゴルフ授業開講大学
- ▶全国大学体育連合大学会員

▶条件

- ▶申請数上限：40本（内ショートアイアン：10本）
- ▶担当教員と用具管理事務職員の配置
- ▶報告書・学生アンケート
- ▶送料負担

* 全国大学体育連合の意向に基づく

申請数の上限（総数40本、内ショートアイアンを10本までとする上限設定）を定めた理由として、用品提供事業制度設計時には、大学ゴルフ授業でのニーズが大きいことに加え、需要の大半はショートアイアンが占めているとの予測があったことが挙げられる。また不正受給防止と受給大学事務部門へのアピールのため、担当教員のほか用具管理事務職員を配置することを要件としている。

本事業における申請から配布までの流れについては図2に示した通りである。



まず、ゴルフ用品の提供を希望する大学は、大体連ホームページを通じて必要事項を申請する。申請書類は、希望クラブの種類と本数、ゴルフ授

業の実施状況、保有ゴルフクラブの現況、所有権移転に関する同意書の4点である。さらに、クラブの提供を受けた後には、これを使用した授業に関する報告書および、受講生の感想アンケートを実施することが義務づけられている。

なお、大体連の意向により、本申請ができるのは、大体連会員かつ大学会員に限定されている。これにより大学は送料のみの負担で最新モデルを含むクラブを入手することができる。

2. ゴルフ用品提供の申請状況

2016年における提供用品の在庫状況について表2にまとめた。

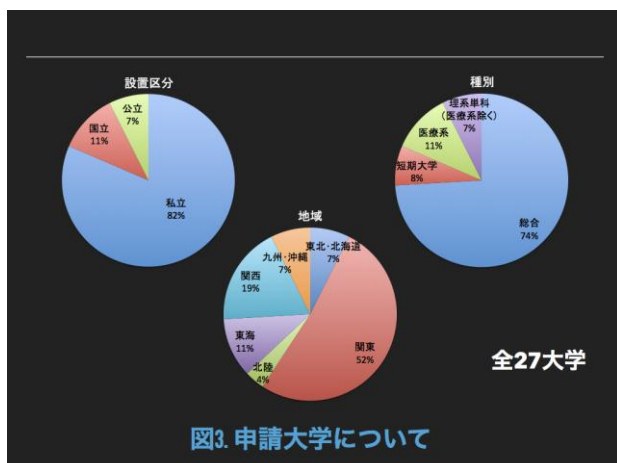
表2 提供用品の在庫状況

	2016/05/16		2016/10/24	
	n	%	n	%
IW	81	9.2	42	4.1
W	32	3.6	94	9.2
L/I	77	8.7	30	2.9
7I	482	54.7	592	57.8
S/I	51	5.8	103	10.0
L-IW	13	1.5	0	0.0
L-W	18	2.0	0	0.0
L-7I	94	10.7	126	12.3
L-S/I	28	3.2	0	0.0
Left-W	0	0.0	24	2.3
Left-7I	5	0.6	14	1.4
Total	881	100.0	1025	100.0

事業開始当初である5月現在とその年の後期授業開始約1ヶ月後となる同年10月とも、7番アイアンが全体の半数以上を占めている（6月54.7%、10月57.8%）。

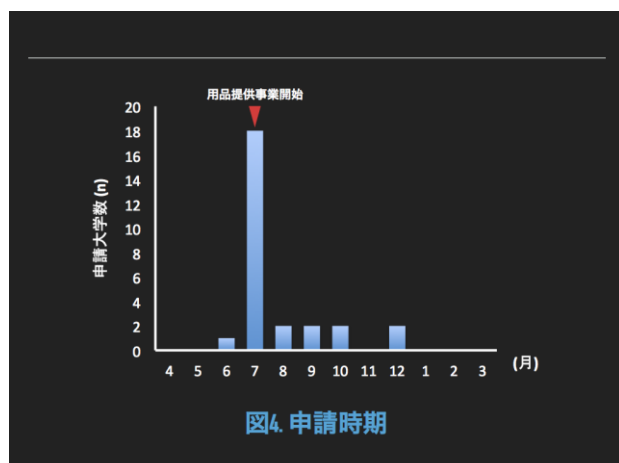
申請した大学は全部で27大学であり、その内訳は図3の通りであった。

設置区分別に見ると私立大学が82%を占め、種別に見ると総合大学が74%を占めている。また地域別に見ると関東地方の大学が52%を占めているものの、東北・北海道地域から九州・沖縄地域まで全国の大学から申請があった。



申請時期については図4に示したとおりである。本事業開始時である7月に大半の申請があり、その他の月はあまり申請が無いことが分かる。

用品提供申請大学のゴルフ授業の概要は表3に示した通りであった。



本事業開始時である7月に大半の申請があり、その他の月はあまり申請が無いことが分かる。

用品提供申請大学のゴルフ授業の概要は表3に示した通りであった。

2 大学を除いてすでにゴルフ授業の実績を有しており、受講者数の平均人数は 62.5 ± 52.2 人、最大で230人、最小で5人であった（中央値37.5人）。

表3. 申請大学におけるゴルフ授業

	ゴルフ授業	学外実習	受講者数（人）	
実績あり	25	17	mean	62.5
検討中	2	10	SD	52.2
Total	27	27	max	230.0
			min	5.0
			median	37.5

申請クラブ数の内訳については、図5および表4に示したとおりであった。申請クラブの種類については、番手毎の供給量にバラツキがあるためウッド、ロングアイアン、7番アイアン、ショートアイアンに分類した。左利き用は、供給量全体が少ないため7番アイアンのみであった。また、希望が集中した場合には、申請が重複した大学間で需給調整をした後、配分した。

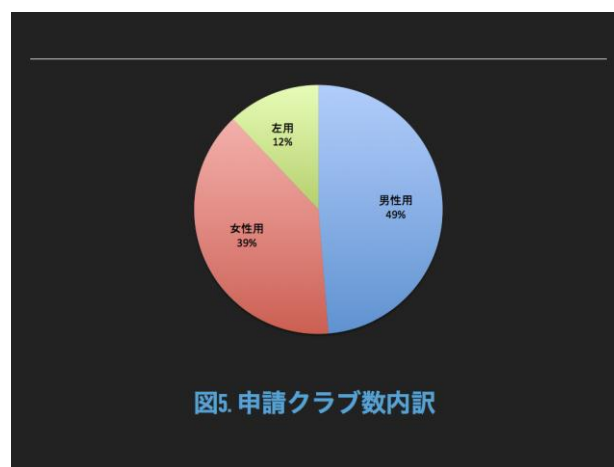


表4. 需給内訳

	累計供給数 (本)	申請数 (本)	需給率 (%) = 申請数 / 累計供給数 × 100
男性用 ドライバー	141	147	104.3
ウッド	135	109	80.7
ロングアイアン	108	85	78.7
7番アイアン	655	72	11.0
ショート・アイアン	144	59	41.0
女性用 ドライバー	28	122	435.7
ウッド	52	128	246.2
7番アイアン	158	36	22.8
ショート・アイアン	41	94	229.3
左利き用 ウッド	24	0	0.0
アイアン	39	117	300.0
Total	1,525	969	63.5

申請内訳を性別で見ると、男性用クラブが49%、女性用は39%、左用が12%であった（図5）。また番手別では女性用ドライバーとウッドが申請数が多く（ドライバー：122本、ウッド128本）、左利き用ウッド（0本）と女性用7番アイアン（36本）と少ない。また供給料に対する需要の割合を需給率として求めた（需給率=申請本数/累計供給数；%）。需給率が高いほど、供給不足であることを示すものである。これにより番手別申請数を比較すると、女性用ドライバーが435.7%と突出して高値を示し、次いで順に、女性用ウッド（246.2%）、左利き用アイアン（300.0%）、女性用ショートアイアン（229.3%）と続く（表4）。

3. 学生の反応

学生の反応については、用品提供を受けた授業の終了時期に、インターネットにおけるアンケートサイトを通じて収集した。回答者内訳は表5のとおりであった。内訳は、男性が140人、女性が53人であり、年齢は全体で19.2±0.9歳であった。

表5. 回答者

	n	y/o
男子	140	19.1±0.9
女子	53	19.4±0.9
合計	193	19.2±0.9

回答大学数：6
回答/申請=22.2%

提供クラブに関する感想は、表6と図6に示した。提供クラブのクオリティに対して、受講生は非常に良い評価をしており、これによりゴルフというスポーツそのものにも前向きなっている様子がうかがえる。

表6. 感想-クラブについて

継続の 意思	使いやすい	コントロール しやすい	高品質	道具の 進化	軽い	音が良い	グリップが 良い
yes	43		11			1	2
?	32	3	2	1	1		
no	4						

いいゾ〜「コレこのクラブ使いやすいスギィ！！」
自分購入イイっすか？
使いやすかったから
これからも使わせて頂くぜ！
突然長文すいません許してください
何でもしますから！
(なんでもするとは言っていない。)

ピカピカ綺麗で
テンションが上がりました。
ありがとうございました。

新しいものは
すごく打ちやすく
音もでて気持ちよかったです。

新しいクラブになってから
前よりも飛ぶようになりました。
ありがとうございました。

もともとあった物は、古いものばかりで
へこんでいたりしていたのですが、
とても綺麗なクラブを使えることで
気持ちも大分違い、
さらに楽しい授業になりました。
ありがとうございます。
ゴルフの面白さがもっと学生に広がるといいなと思いました。

図6. 学生の生の感想（抜粋）

4. ゴルフの継続について

受講生の今後のゴルフの継続の意思については表7に示した。継続したいと考える者が53.9%であり、継続しないとした者は38.3%であった。

表7. ゴルフの継続について

yes	104	53.9%
?	74	7.8%
no	15	38.3%

ゴルフを継続したい、あるいは継続しない理由については表8に示したとおりであった。

表8. ゴルフを継続したい理由としない理由

継続したい理由

楽しい	将来 役に立つ	生涯 スポーツ	気持ちいい	向上心	趣味に したい	気軽に できる	クラブ活動 として
32	9	6	6	2	1	1	1

継続しない理由

継続の意思	お金が ない	道具がない	環境がない	一人では やらない	必要性を 感じない	機会がない	時間がない	他のスポー ツがやりたい
?	4	3	3	2	2	2	3	1
no						1	1	

継続したい理由としては、ゴルフあるいはゴルフ授業が「楽しい」とする者が最も多く、継続しない明確な理由はないものの、継続の意思が不明瞭なもの（表8における「?」）として、「お金がない」、「道具がない」、「環境がない」、「時間がない」などが挙げられていた。

5. まとめ

(1) 用品提供事業について

7番アイアンの供給量が多いことから、大学ゴルフ授業研究会としては、安全な7番アイアンを

使用した授業開発をする必要性が挙げられた。同時に、ゴルフ用品業界に対しては、試打クラブの多様化を進めるよう要望していくことにより、提供クラブの多様化が期待できる。

またウッド系クラブと左利き用のニーズが高い一方で、供給量が少ないことが明らかとなった。

(2) 大学ゴルフ授業の課題

受講生のゴルフ継続を促進するために、「楽しいゴルフ授業」とは何か、学生の動向を探りつつ展開して行く必要性が挙げられた。また、学生に対して用具、機会、時間、環境の継続的な支援をすることの必要性が示唆された。

＜ゴルフ教育研究への投稿・執筆にあたり＞

【投稿資格】

大学、短大、および高等専門学校で「ゴルフ」の授業を担当している先生

【原稿種別】

本誌の原稿種別には下記のものがあります。なお、下記1)～3)については、英文タイトルおよび、英語または日本語のアブストラクトが必要です。

- 1) 論文 (査読有)
- 2) 報告 (査読有)
- 3) 授業アイデア提案 (査読有)
- 4) 資料 ※研究会での口頭発表の概要 (査読無)
- 5) その他 ※編集委員会が必要と認めたもの (査読無)

【原稿分量】

制限ありません。

【原稿フォーマット】

ホームページに掲載されているフォーマットをご利用ください。

【発行時期】

オンラインジャーナルのため、投稿は随時受付、2名の査読者による査読後、「掲載可」の判定に至った原稿は速やかに発行します。

ゴルフ教育研究

第 4 巻第 1 号

2018 年（平成 30 年）4 月 15 日 発 行

発行者：大学ゴルフ授業研究会

編集事務局：〒471-8532 愛知県豊田市大池町汐取 1

愛知学泉大学 高橋憲司（8-407）研究室内

TEL 0565-35-8430

E-mail : kentakahashi@gakusen.ac.jp